

# 講演会型+子育てサロン型（中学校）

学校名等	可児市立中部中学校
実施日時	平成29年10月3日（火）
会場	中部中学校図書室
参加人数	15名
学習課題（分野）	防犯教室、校長講話、子育てサロン
運営者の願い	<p>【主催者の願い】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○「もう中学生だから、もう大きいから大丈夫」ではなく、防犯に対する知識を深め、実生活に反映してほしい。</li> <li>○校長先生のお話が聴きたい。</li> <li>○市の家庭教育のリーダー研で学んできた資料を使ってサロンで交流したい。</li> </ul>

★「講話+子育てサロン」組み合わせることで学びが充実!

★専門家からのお話で、みんなで学習!

## 学習の内容

<p>&lt;当日の日程&gt;</p> <p>【講話】9:30～</p> <p>第一部 防犯教室 青少年を取り巻く現状 連れ去り防止のために</p> <p>第二部 校長先生の講話 学校経営 生徒につけたい力</p> <p>【子育てサロン】11:00～</p> <p>家庭教育プログラム（みんなで子育てⅢ）「SOSのサイン」を使ったサロン。</p>	<p>&lt;講話の講師&gt;</p> <p>第一部 防犯教室</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○可児地区防犯協会 連れ去り防止教育 ひまわり班</li> <li>○可児警察署生活安全課</li> <li>○少年補導員</li> <li>○可児地区防犯協会</li> <li>○地域安全活動アドバイザー</li> </ul> <p>第二部 校長先生の講話</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○可児市立中部中学校校長</li> </ul>
--	--

【第一部 講話内容】

- 大切な命は自分で守る
- 青少年犯罪の現状
- 子どもが犯罪に巻き込まれないための留意点

【第二部 講話内容】

- 子どもに付けたい力と学校教育

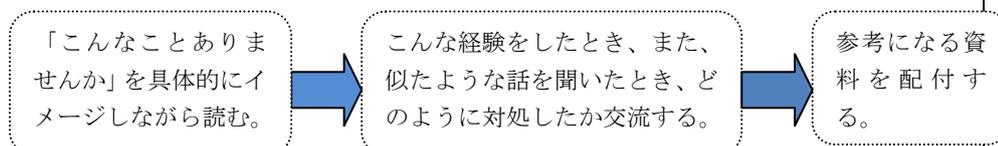
<参加者の講話の感想>

- 防犯に対して意識が高まりました。
- 子どもたちが周りには、いろいろな危険が潜んでいるという現実があることを学びました。
- 校長先生の教育に対する筋の通ったお話を聞くことができました。今後の子育ての参考になりました。
- 子どもが犯罪に巻き込まれないための留意点をたくさん教えていただきました。実際の事例を織り込みながらのお話だったので、防犯意識の低さを考えさせられました。

<子育てサロン>

○学級長さんが市の家庭教育学級リーダー研修会で子育てプログラムを利用した研修をしてこられました。その資料を皆さんに提示し、一緒に考えました。（当日使った資料は、裏面にあります。）※1

○子育てプログラムを使ったサロンの進め方



<参加者の感想>

- サロンでは、いろいろな意見が出ました。同じ年頃の子どもをもつ親が子育てについて語り合うことは有意義だと感じました。
- 飲み物やお菓子をいただきながら、皆さんとリラックスした気持ちで話したり聞いたりできました。楽しかったです。

★子育てプログラム利用!

「こんな時どうしよう?」とみんなで考えることができる!

<実践を終えて>

・講演会と子育てサロンを組み合わせ実践。講演会では、防犯の専門家や校長先生からお話を聞き、子育てサロンでは、リーダーさんが、可児市の研修会で学んできたことを自校の家庭教育学級でも実践されました。リーダーさんからの報告書には「実に充実した時間となりました」と結んでおられます。

※1 子育てサロンで使った資料

17 SOSのサイン (～中学校)
ワークシート1

**「一番最初に気付いてあげられるのは誰？」**

**こんなことはありませんか？**

今までほとんど学校を休んだことがなかった中1のみどりさん。1週間程前から、「お腹が痛い」「頭が痛い」と言って、学校を休み始めました。毎日午後には、すっかり回復するようで、「明日は学校行けるよね」というお母さんの言葉に「うん」と小さくうなずきますが、朝になるとベットから出てきません。

最近、休みの日もほとんど出かけずに家の中でゴロゴロしているみどりさん。「今までは、休みの日は友だちと遊びに行っていたのに、お友だちと何かあったのかしら。」と、お母さんは不安です。



**ワーク1**

みどりさんのお母さんのような経験をした（または、似たような話を聞いた）ことはありませんか？そのような時はどう対処しましたか？交流しましょう。

---



---



---



---

17 SOSのサイン (～中学校)
資料1

**子どもが辛い思いを伝えてきた時に大人がしがちな失敗**

辛いと訴えて来た時、子にとって、親は身近で一番頼りになる存在であって欲しいものです。しかし、心配のあまり、一刻も早く解決をしようとして、子どもの顔の一部を聞いただけで事態を全て理解したような気持ちになり勝手に動き出し、より悪化することもあるのです。次のようなことはありませんか？

**Worst 3**

**子どもの気持ちを置き去りにする**

子どもの話を聞くよりも、「早く治らないといけない」といひどくあわてて、事態収拾に動機になり、肝心の子どもの気持ちを置き去りにしてしまう。



これっていいの？

**子どもを責めてしまう**

大人がその場にショックを受け、事態を受け入れられず、「あなたが悪いからこういうことが起こった」とか、「どうしてもっと早く治らなかったのか」と子どもを責めてしまふ。



これっていいの？

**親の価値観を押し付け安易に励ます**

大人の価値観を基準にして、「そんなことを「つらい」なんて言っているのは慣れない」「大人になれば、もっと辛いことがある」「元気を出して、すぐに治られるよ」と、安易に励まし言葉を投げかけてしまう。



これっていいの？

『イラスト版子どものアワーション』(徳田源代執筆・編集 2014年 杏苑出版)

「親はわたしの気持ちをきちんと理解しようとしている」と思ってもらえる態度で接することが大切です。子どもが黙り込んで、「沈黙」も自分なりに心の整理をしている大切な時間と考え、急かさず、じっくり耳を傾け、医療や批判、忠告等は避けて、聞くことに徹しましょう。「それはつらかったね」「悲しかったね。本当によく話してくれたね」と寄り添うことや、相手の声のトーンやスピードに合わせて話すことで、自分の言葉がより相手に届きます。元気づけようと張り切りすぎてしまうと、落ち込んでいる相手に負担をかけてしまうこともあります。